言語にまつわる体験談や学習のヒント

新連載コラム・拡大版

外国語のススメ　LL研究室

「外国語のススメ　ＬＬ研究室」を今号からスタートします。ＬＬ（Language　Laboratory）研究室の教員による言語にまつわる体験談や外国語学習のヒントを、肩の凝らないエッセーとして随時掲載します。コラムの全文は、ＬＬ研究室のホームページに掲載。今号は４人の先生方のエッセーをお届けします。

▲　パリから～楽しい一日の始まり（根岸教授撮影）

英　語

上原　正博 法学部准教授

◀　オーストラリアでボランティアに励む学生たち

「役に立たなくてもいい」精神で

大学では「役に立たなくてもいい」の精神で勉強することです。「役に立つ」を「期待」に換えてもいいです。たとえば、英語を勉強すると就職に有利といった期待です。そんな期待に応えるために英語があるわけではないのですから、あなたが勝手に期待しているものに期待しないほうがよいのです。

このような姿勢でいると、英語との本当の関係が見えてきます。「英語と出合えて良かったね」と思えるかどうか。同様に人との関係も「出会えて良かった」でありたいものです。それでも、役に立つか否かで人を見る場合もあります。業界の「人材」という言い方は良い印象がありませんね。英語では"human resources"というのですが、"resources"っていわゆる資源ですから。石油のように何にでも変われるので重宝がられたとしても、枯渇してしまったらどうしますか。

法律学も同じです。資格試験に受かっても受からなくても、法律を学んで良かったね、ということがあるのです。それはおそらく、「人は役に立つか否かでその価値が決定されるのではない」という人への尊さであるでしょうし、「そのままの自分を肯定して生きていく」態度でもあるでしょう。

そのような姿勢で臨めば、法律学が利用するために学ぶものではなく、このような考えを分かちあえる社会に近づくために、私たちのすべきことを模索していくきっかけを与えてくれるものだとわかることでしょう。　（ＬＬ研究室神田分室長）

ドイツ語

寺尾　格 経済学部教授

◀　「第九」合唱の練習でドイツ語指導

眠っている身体感覚が活性化

２年前に専修大学フィルでベートーベン第九の合唱を歌った。複雑なコード進行や難しい音程も比較的少なく、それほど難しいわけではないのだが、オーケストラと共に歌い上げる「歓喜」の盛り上がりは一級品で、まさに圧倒的としか言えない「歓喜」の経験となった。

合唱は格調の高いシラーのドイツ語なので、やっかいなのはドイツ語の「発音」である。例えば、冒頭に響く「フロイデ（歓喜）！」はバスが口火を切り、すぐ続いて合唱団が圧倒的な迫力で繰り返す。

ここで失敗すると、後がメチャクチャとなる大事な一声であるのだが、これがなかなか難しい。カタカナで「フロイデ！」と歌うと、後に引っ張る感じになって「ふろいでぇ～」となる。

ドイツ語はアクセント感覚が強く、最初の母音に続く後ろの母音は軽く、あいまいになるので、ほとんど「ぉ」のみの１音節のように響き、だ・か・らティンパニーが叩かれるように強い衝撃の迫力が出てくる。

ところが「ふろいでぇ～」と後に引っ張るように歌うと、それは「お風呂やでぇ～」と歌われる演歌か浪花節のように、全体にベタ～ッとした湿っぽい雰囲気になってしまう。

新しいリズム感の外国語を学ぶことは、新しい発音を通して新しい身体の使い方を学ぶことであり、それは従来、眠って隠れていた身体感覚を常に新たに活性化することにつながる。ことばを学ぶ本当の意味は、そこにこそあるのではないだろうか。　（ＬＬ研究室長）

フランス語

根岸　徹郎 法学部教授

◀　あまり青くないカルト・ブルー

カルト―カードのお話を少し

昔からフランスはカード社会と言われますが、わたしたち外国人にまず、必要なのは、滞在許可証です。３カ月以上の滞在には取得が必須。でもこれを取るのが大変。役所で延々と待たされ、無愛想なおばさんに書類を提出、待つこと１カ月ほどでようやく……。しかも申請には住居の証明が要求され、そのために公共料金の支払証か銀行口座の証明が必要なのに、銀行口座開設にはこの滞在許可証が要るというパラドックス！

次に銀行のカード。口座のある銀行が発行してくれる青いカルト・ブルー・ナショナルというのが一番便利。普段の買物からカフェの支払いまで、少額でも使うことができます。ちなみに青はフランスのナショナルカラーです。

ところでこの間、有効期限が切れたので新しいカードと交換したら、デザインが一新されていてあまり青くない！　係の人が笑いながら「もうナショナルじゃなくて、ユーロのカードだよ」と教えてくれました。ユーロ圏へとカードの色も種類も変わったわけです。しかも裏面のサインは不要と言われて、もう一度びっくり。ヨーロッパで個人のアイデンティティーを支える装置だったサインが要らないとは！

近い将来にはカルト・ブルーだけではなく、滞在許可証もヨーロッパ圏のものになるのでしょうか？　そうなればどの国で取得するのが簡単か、情報が飛び交うことでしょう。役所が非能率的なフランスで取るのが大変であることは間違いないでしょうが……。

コリア語

厳基珠 ネットワーク情報学部教授

◀　本場石焼ビビンバ

韓国のおばさんとビビンバ

今は「韓流」という言葉がそれほど目新しくもなくなった。それに円高のおかげで韓国旅行に行く人も多くなっている。学生たちも例外ではない。

先日、学生たちと韓国旅行について話を交わした。彼女たちが韓国へ行った時、本場のビビンバが食べたくなって、通りかがりのおばさんに「ビビンバのフランチャイズ店はどこですか」と聞いたが、よく通じなかったという。それは当たり前で、韓国語では「フランチャイズ店」という言葉は、まだあまり一般的ではなく、「チェーン店」のようには通じないからだ。

結局、彼女らは「ビビンバが食べたいです」という言葉を何回も繰り返し言ったらしい。そうしたらそのおばさんは、やっと分かったとうなずいてくれ、二人を食堂へ連れて行き、そこで一緒に食事をすることになり、しかもその食事代まで、そのおばさんが払ってくれたのだという。彼女らがどんなに感激したかは想像に難くない。

日本でならありえないことなのかもしれないが、韓国ではたまにはあることだ。私の80代になる母も、外出先で通りがかりの女性に、近くによい食堂がないかどうか尋ねたら、自分もちょうどお昼を食べようとしていたところだったと言いながら、一緒に食事をしたうえ、食事代まで払ってもらったことがある。

母はもちろん、その話を聞いた私も、なんていい人なんだろうと感動した。とはいっても、一般的に韓国人が特別に親切かというと、そうでもなさそうだ。